

自我同一性早期完了地位についての一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 努, Okada, Tsutomu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00001092

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



自我同一性早期完了地位についての一考察

岡 田 努

問 題

Erikson (1959) は、青年期後期（ほぼ大学生時期に相当）において青年が自分自身を定義し精神的安定と対社会的な位置づけを獲得する過程に注目し、自我同一性 (ego identity) とよばれる概念を提唱した。Marcia (1966) はこの概念を発展させ、自我同一地位 (ego identity status) という類型を想定した。すなわち、自己の進路について思い悩み選択に苦慮する「危機 (crisis)」と、決定された自己の在り方に積極的に関与・傾倒する「傾倒 (commitment)」の2つの変数から、以下の4地位を導き出している。①危機を経験し、その結果十分な傾倒を持つ「達成地位 (achievement)」, ②明白な危機を経ずにそれまでの周囲の大人（主に両親）の価値観をそのまま継承しこれに傾倒する「早期完了地位 (foreclosure 早産あるいは権威受容ともいわれる)」, ③危機の最中の中で自己決定の模索をしながら、傾倒する対象が見つからない状態の「モラトリアム地位 (moratorium)」, ④模索も傾倒もない、いわば心理的に立ち往生してしまった状態の「同一性拡散地位 (diffusion)」である。その後の研究で多数の中間的地位や亜型が設定されたが（鎌・宮下・岡本, 1984）、細分化が進むことで自我同一性地位の全体像が逆に把握しにくくなるといった面も出ている。

Marcia は自我同一性地位面接という半構造化された面接法によって、これらの地位の判定を行った。この方法は、質問紙法による社会的望ましきや構え、質問紙への精通による反応の偏りなどを避ける点で有効である反面、被面接者が素直に自分を表現できる場面を設定することの困難さ、面接者の感受性による誤差などの問題が上げられている（高橋, 1984）。一方、加藤（1983）は日本版の質問紙法による自我

同一性地位尺度を作成し、面接法との高い一致度を報告している。

こうした自我同一性地位のうち早期完了地位については、自分の目標と両親の目標の間に不協和がない、すべての体験が幼児期以来の自分の信念を補強するだけである、性格的な硬さをもつ（鎌他, 1984）、権威主義的である（Marcia, 1966）、不安が低く社会的承認への欲求が高い（杉原, 1988）などの特徴が報告されている一方で、危うさや硬さがなく、要領よく生きていく（無藤, 1979など）、未来志向で過去・現在・未来イメージが自我同一性達成者と同じくらいポジティブ（都筑, 1993）など相反する特徴も報告されている。北村（1983）は、従来記述されてきた、両親の価値観を継承し、防衛的な性格傾向の強い早期完了青年（固いF）の他に、社会一般の価値観を抵抗なく取り入れ、健康的で快活な早期完了青年（柔軟なF）が最近見られると指摘している。後者は、内面の問題や社会問題など危機を誘発する事柄に対して積極的関与を避け、社会の一般的価値観に同調し、（職業などに）コミットするとされている。

しかしこうした「柔軟なF」は、村瀬（1984）が指摘する「平穏青年」像と合致するものである。村瀬（1984）は、多くの青年は、「疾風怒濤」と呼ばれるような精神的不安定を経験することなく、そのまま成人していくとして、従来の青年期危機説に疑問を呈している。平穏無事に自我同一性を獲得し、なおかつ柔軟さを失わない青年が大多数であり、Erikson が記述するような、刻苦苦悩して自我同一性を獲得する青年はむしろ少数であるということである。このことは「危機」のなさや「傾倒」の存在という基準では、従来から見られる平均的な青年までも「早期完了地位」とみなしてしまう可能性が示唆される。

また、杉原（1988）は「両親のイデオロギーを引き継いで危機を経験しない」という Marcia の見解

が日本の早期完了青年には見られずむしろ「漠然としたイデオロギーに安住できてしまう」としている。しかし政治的イデオロギーそのものが危機の対象となりにくい日本において、イデオロギー領域の漠然さを早期完了青年の特徴として論じるのはやや無理があるとも考えられる。

このように早期完了青年には様々な像が提唱されており、特に、ほぼ同一の青年像に対して、早期完了とみなす立場(無藤, 1979; 北村, 1983など)と、みなさない立場(村瀬, 1984)に分かれているといえよう。

またモラトリアム地位や自我同一性拡散地位青年など臨床的問題になりやすい青年と異なり、適応上の問題を殆ど示さない早期完了青年に関する研究は、杉原(1988)によるケース研究が見られるが、実証的な研究は殆どなされていない。以上のことから、本研究では、早期完了青年像を明確化することを目的として、傾倒と危機から分類された早期完了地位の青年が、早期完了青年の特徴とされる属性によって、どの程度説明しうるかについて検討する。

また大学入学時から職業選択をある程度方向づけられている教員養成学部では、早期完了的な職業志向が強いものと考えられる。すなわち、教職を志望する学生ほど、そうでない学生よりも早期完了的特徴を強くもつものと考えられる。

下山(1992)は職業決定に関する同一性について、職業決定の状況を現す職業決定尺度及び、職業に対するモラトリアム状態を測定するモラトリアム尺度(「回避」「拡散」「延期」「模索」の下位尺度から成る)を作成した。早期完了青年は職業決定に関して早期に決定し硬直化した決定をしていると考えられるため、職業決定尺度の得点が高く、モラトリアム尺度の得点は低いものと考えられる。

Moore(1987)は家族からの心理的な分離には、両親との情緒的絆そのものを断ち切ってしまう「情緒的断絶 emotional detachment」という様式と、両親との交流をある程度維持しながら、一方で束縛されずに自由でありたいとする精神的自立 disengagement」という様式があるとしている。Mooreによると、精神的自立による分離が自我同一性の確立の度合いと高い相関を持ち、心理的離乳を可能にするのに対して、情緒的断絶による分離では、物理的な家族からの分離にも拘らず、心理的にはかえって自立が困難で、自己評価や自我同一性の確立が低いとしている。早期完了青年が両親の価値観を無批判に継承しているならば、こうした青年は家族から

の心理的離乳の度合いが小さく、物理的な分離への志向性も小さいものと考えられ、精神的自立・情緒的断絶の度合いが共に低いものと考えられる。

手 続

以下の尺度・項目について質問紙調査を実施した。

(1) 教員志望についての項目 「あなたは将来、学校教員になりたいと思っていますか」の1項目「教員志望・教員志望ではない・未定」の内から1つを選択する。

(2) 自我同一性地位尺度 加藤(1983)の作成した、自我同一性地位面接に代わる質問紙である。12項目かなり「過去の危機」「現在の自己投入」「将来の自己投入への希求」(各4項目ずつ)の下位尺度を持つ。

(3) 職業決定・未決定尺度 下山(1992)のモラトリアム尺度及び職業決定尺度を用いる。モラトリアム尺度は大学生の職業同一性に関するモラトリアム状態を測定するもので、Eriksonの心理社会的モラトリアムに相当する「模索」、自我同一性拡散状態を反映する「拡散」、及び日本の大学生特有のモラトリアム状態を反映するとされる「回避」「延期」の各下位尺度から成っている。それぞれの下位尺度は6項目ずつとなっているが、「延期」下位尺度の原項目に含まれる「職業のことは、大学4年生になってから考えるつもりだ」については、本研究では1年制の学生も調査対象に含まれ調査実施上不適切なため削除した。職業決定尺度は、職業決定の程度を測定するもので、下山(1986)における職業未決定尺度の「決定」下位尺度から引用された。

本研究では、両尺度を併せて以下「職業決定・未決定尺度」として用いる。尚、自我同一性地位尺度との混同を避けるため、本尺度の下位尺度はすべて「職業」を冠して表記する。

(4) 家族分離尺度

Moore(1987)の作成した家族からの自立の程度を測る尺度の邦訳版(岡田, 1991)。本尺度は青年期後期の両親からの心理的な分離を測定するためのもので、両親との情緒的絆そのものを断ってしまう「情緒的断絶」と、両親との交流を保ちながらも束縛されない自由を求める「精神的自立」の2つの下位尺度から成っている。

(5) 早期完了特徴項目

鐘・宮下・岡本(1984); 杉原(1988); Marcia(1966)などの記述をもとに早期完了地位の青年の特徴に関する16項目を作成した。

(1)を除き各尺度とも「全くあてはまらない(0点)」から「非常にあてはまる(5点)」までの6件法である。

実施時期：1993年4月から5月 教育学部講義時間の一部を利用して実施

調査対象：教育学部2, 3, 4年次および養護特別科の学生132名中女子103名

結 果

早期完了特徴項目について主成分分析を行い3主成分が得られた。第I主成分は、「これから先も自分

の信念は大きく変わりはしないだろう」など強い信念、柔軟性のなさに関する項目の高い固有ベクトルが得られた。第II主成分は、「両親の価値観に疑問をもったことはない」など、両親や周囲の年長者の生き方をそのまま取り入れた姿勢を示す項目に高い固有ベクトルが得られた。第III主成分については「自分は常識的な人間だ」など自分の性格に関する認知の項目に高い固有ベクトルが得られた(Table1)。これらのうち早期完了青年の特徴に関連のあると思われる第I, 第II主成分について固有ベクトル3以上の項目について、再度主成分分析を行い2主成分を得た上で、主成分得点を求めた (Table2)。

Table 1 早期完了特徴項目主成分分析

項 目 / 主 成 分	I	II	III
1 自分は世間体(せけんてい)など気にしない	.078	-.361	-.019
2 自分は身勝手な人間だ	-.175	-.006	.500
3 これから先も自分の信念は大きく変わりはしないだろう	.358	-.240	.078
4 周りの大人の言うことは大体において正しいと思う	.262	.150	.345
5 両親の価値観に疑問を持ったことはない	.218	.315	-.023
6 自分は頑固な人間だ	-.136	-.042	.432
7 自分の判断は大体において両親から支持されると思う	.349	.162	.065
8 自分の価値観は社会一般とズレたことがある	-.154	-.110	.232
9 親が望まないような生き方はしたくない	.171	.348	.066
10 人生の選択に迷うべきではない	.071	.296	.182
11 自分は周りの大人や親の言う通りに生きてきた	-.068	.391	.226
12 自分の価値観は両親と一致している	.341	.301	-.103
13 自分は常識的な人間だ	.144	.150	-.421
14 学部や専攻を決める時、真剣に考えて決めた	.346	-.307	-.035
15 自分の信念は昔から一貫しており、大きくは変わらない	.358	-.179	.299
16 今所属している学部や専攻は迷わず決めた	.363	-.225	.109

Table 2 第II主成分までに高い固有値を持つ項目のみで主成分分析を行った固有ベクトル

	I 硬 さ 一貫性	II 両親への 従順さ
3 これから先も自分の信念は大きく変わりはしないだろう	.415	-.144
7 自分の判断は大体において両親から支持されると思う	.335	.297
14 学部や専攻を決める時、真剣に考えて決めた	.414	-.236
15 自分の信念は昔から一貫しており、大きくは変わらない	.434	-.096
16 今所属している学部や専攻は迷わず決めた	.445	-.090
1 自分は世間体(せけんてい)など気にしない	.144	-.368
5 両親の価値観に疑問を持ったことはない	.150	.372
9 親が望まないような生き方はしたくない	.147	.454
11 自分は周りの大人や親の言う通りに生きてきた	-.115	.409
12 自分の価値観は両親と一致している	.283	.414

自我同一性地位尺度については、各下位尺度ごとに Cronbach の α 係数を求めたところ「現在の自己投入」.809、「過去の危機」.221、「将来の自己投入の希求」.465と「現在の自己投入」以外は低い値しか示さなかった。よって同尺度を再度主因子法による因子分析を行い3因子を得た。Varimax 回転後の因子負荷量を Table3 に示す。第I因子は自分自身が何かを打ち込めるものを見出せるか否かに関するもので、「傾倒」と命名された。第II因子は自分自身の方向性について迷ったり、探し求めている姿勢を表す内容であり、「危機」と命名された。第III因子については2項目と小さいことから本研究では除外し、第I・第II因子からなる新たな自我同一性地位尺度として本研究では用いることとした。各因子・項目の α 係数は、傾倒.805、危機.610であった。

家族分離尺度、職業決定・未決定尺度については各下位尺度ごとの合成得点を求めた。両尺度の項目を Table4 に示す。

各尺度得点の平均と標準偏差を Table5 に示す。

自我同一性地位尺度を元に、Marcia (1966) に基づき、同一性地位の分類を行った。すなわち傾倒・危機それぞれの分布の上位・下位約30%を基準として、傾倒が上位かつ危機も上位の者を達成群、傾倒が下位で危機が上位の者をモラトリアム群、傾倒が上位で危機が下位の者を早期完了群、傾倒・危機共に下位の者を拡散群と分類した。各地位でのケース数は同一性達成20名、モラトリアム9名、早期完了7名、拡散13名(計49名)であった。

同一性地位間での各尺度得点についての一元配置分散分析を行ったところ職業決定・未決定尺度については「職業決定」「職業回避」「職業拡散」「職業模索」の各下位尺度について $p < .01$ で有意となった。多重比較 (Tukey の WSD 法) の結果「職業決定」ではモラトリアム、拡散よりも早期完了が高く、「職業回避」については早期完了と達成よりもモラトリアムが高く「職業拡散」については早期完了、達成

Table 3 自我同一性地位尺度の因子負荷量 (Varimax回転後)

	I 傾倒	II 危機	III
*私は、『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っていない	.829	.085	.071
*私には特にうちこむものはない	.786	-.047	.081
私は、自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのか知っている	.719	.054	-.175
私は今、自分の目標をなしとげるために努力している	.714	-.030	.083
*私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない	.672	.051	.070
*私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない	.497	.295	-.085
私は、一生けんめいにうちこめるものを積極的に探し求めている	.307	.773	.028

私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある	-.009	.765	.035
私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている	.502	.560	.082
私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある	-.337	.551	-.144

*私は、親やまわりの人の期待にそった生き方をする事に疑問を感じたことはない	-.012	.188	.806
*私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない	.052	-.174	.715

註) *は逆転項目 (予め得点を逆転した上で分析してあるため負荷量の方向は逆転項目と一致)

Table 4 家族分離尺度および職業決定・未決定尺度の項目

家族分離尺度	
下位尺度	項目
情緒的断絶	自分はもう十分大人であると思う
情緒的自立	今ではもう家族には親しみを感じない
情緒的断絶	自分は大人の考え方ができる
情緒的自立	家の人は自分にとって身近なものとは感じない
情緒的自立	家族とは絆を断っている
情緒的断絶	自分は自立していると思う
情緒的自立	もう自分は家族の一員ではないと感じている
情緒的断絶	自分のことは自分で決められる
情緒的自立	家族といっても自分がお客のように感じる
職業決定・未決定尺度	
下位尺度	項目
決定	自分の職業計画は、着実に進んでいると思う
回避	何を基準にして将来の職業を考えたらよいかわからない
拡散	望む職業につけないのではと不安になる
延期	せっかく大学に入ったのだから、今は職業のことは考えたくない
模索	将来やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている
決定	自分のやりたい職業は決まっており、今は、それを実現していく段階である
回避	できることなら職業決定は、いつまでも先に延ばして続けておきたい
拡散	職業決定のことを考えると、とても焦りを感じる
延期	職業決定と言われても、まだ先のことのようにピンとこない
模索	職業に関する情報がまだ充分にないので、情報を集めてから決定したい
決定	自分の職業決定には自信をもっている
回避	将来自分が働いている姿が全く思い浮かばない
拡散	これまで自分自身で決定するという経験が少なく職業決定のことを考えると不安になる
延期	就職については、まじめに努力しなくてもなんとかなると思っている
模索	将来の職業については、いくつかの職種に絞られてきたが最終的にひとつに決められない
決定	自分なりに考えた結果、最終的にひとつの職業を選んだ
回避	職業に就くということは、墓場に入るイメージがある
拡散	誤った職業決定をしてしまうのではないかと不安があり、決定できない
延期	自分の将来の職業について真剣に考えたことがない
模索	自分の無限の可能性を考えると、とてもひとつの職業に限定できない
回避	自分が職業としてどのようなことをやりたいのかわからない
拡散	自分一人で職業を決める自信がない
延期	今の自分にとって職業につくことは、重要なことではない
模索	これだと思う職業が見つかるまでじっくり探していくつもりだ
回避	できることなら、職業など持たず、いつまでも好きなことをしたい
拡散	私はあらゆるものになれるような気持ちになる時と何にもなれないのではないかと いう気持ちになる時がある
模索	職業は決まっていないが今の関心を深めていけば職業につながってくると思う

Table 5 各尺度得点の平均と標準偏差

家族自立尺度				
	精神的自立	情緒的断絶		
平均	7.990	2.631		
標準偏差	(3.397)	(3.058)		
標本数	103	103		

職業決定尺度					
	決定	回避	拡散	延期	模索
平均	9.981	10.796	13.660	5.951	15.069
標準偏差	(4.734)	(5.663)	(5.542)	(3.761)	(5.894)
標本数	103	103	103	102	102

同一性地位尺度		
	傾倒	危機
平均	19.234	13.466
標準偏差	(5.638)	(3.421)
標本数	102	103

註：欠損を含むデータで一部標本数が異なる場合がある

よりもモラトリアムが高く、「職業模索」では早期完了が他の地位よりも低かった (Table6)。

各尺度と早期完了尺度各主成分得点との相関係数を Table7 に示す。ここに見られるように職業決定および同一性地位尺度の傾倒下位尺度と第 I 主成分の間に高い正の相関が見られ、「職業回避」「職業拡散」と第 I 主成分の間に高い負の相関が見られた。

各尺度の上下30%群間での早期完了特徴項目の主成分得点について、平均値の差の検定を行った (但し両親分離尺度の「情緒的断絶」については、分布が低得点に偏り、合成得点が0点の者だけですでに37.9%に達していたため、0点の者のみを以て下位群とした)。その結果 Table8 に示すように、精神的自立で第 I, II 主成分、情緒的断絶での第 II 主成分、職業決定・未決定尺度では決定、回避、延期、模索で第 I 主成分、拡散で第 II 主成分、また自我同一性地位尺度では傾倒で第 I, 第 II 主成分でそれぞれ有意な差が見られた。

早期完了尺度の各主成分に基づく座標平面に傾倒、危機、家族分離尺度の上下30%群及び自我同一性地位の主成分得点の平均値の散布図を Fig.1 に示す。また同様の座標平面に職業決定・未決定尺度の

上下30%各下位尺度、教職志望状況各群及び自我同一性地位の主成分得点の平均値の散布図を Fig.2 に示す。

尚、自我同一性地位尺度の全ケースでの中央値は傾倒が19.83、危機が13.77で理論上の中央値 (傾倒15.5、危機10.5) よりやや上回っている。

Table9 に各同一性地位ごとの教員志望数を示す。ここに見られるように、早期完了地位の者は全員が教員志望であった。

Table 6 同一性地位ごとの各変数と平均と標準偏差

		精神的自立		情緒的断絶	
1	拡散 13	6.154 2.911	1.692 2.869		
2	モラトリアム 9	7.111 4.729	4.000 3.279		
3	早期完了 7	8.286 2.752	0.857 1.864		
4	達成 20	9.000 3.627	2.250 2.468		
F		1.822	2.108		

		決定	回避	拡散	延期	模索
1	拡散 13	9.000 4.163	12.077 4.310	14.692 6.115	5.692 4.049	14.385 4.273
2	モラトリアム 9	5.778 6.476	14.667 6.265	19.111 5.442	5.222 4.177	17.111 6.585
3	早期完了 7	15.143 2.340	6.714 3.861	7.714 5.187	3.571 2.507	7.571 5.884
4	達成 20	10.800 4.764	7.050 5.404	10.850 5.528	4.150 3.514	18.350 5.402
F		5.528**	6.327**	6.974**	.744	7.250**
多重比較 (WSD)		MD < F	FA < M	FA < M		F < DMA

		第I主成分 硬さ・一貫性	第II主成分 両親への従順
1	拡散 13	-0.649 0.673	0.103 1.050
2	モラトリアム 9	-0.424 0.786	0.483 0.666
3	早期完了 7	1.009 0.790	0.536 1.266
4	達成 20	0.371 1.165	-0.452 1.138
F		6.336**	2.451
多重比較 (WSD)		D < F, M < F	

註 * ; p < .1, * ; p < .05, ** ; p < .01

Table 7 各変数と早期完了特徴項目主成分得点との相関

早期完了 変数/主成分	第I主成分 硬さ・一貫性	第II主成分 両親への従順
精神的自立	0.189 (.194)	-0.229 (.114)
情緒的断絶	-0.208 (.151)	-0.165 (.259)
決定	0.640 (.000)	-0.194 (.181)
回避	-0.523 (.000)	0.219 (.130)
拡散	-0.551 (.000)	0.370 (.009)
延期	-0.214 (.141)	0.027 (.855)
模索	-0.203 (.161)	-0.020 (.890)
傾倒	0.553 (.000)	-0.239 (.099)
危機	0.137 (.348)	-0.095 (.518)

註：上段：相関係数
下段：無相関検定での有意水準

Table 8 各変数上下群30%での主成分得点の平均(上段)と標準偏差(下段)

	傾倒	危機	主成分I	主成分II
拡散 n=13	12.538 4.215	9.538 1.941	-0.649 0.673	0.103 1.050
モラトリアム n=9	10.556 4.187	15.778 1.093	-0.424 0.786	0.483 0.666
早期完了 n=7	24.714 1.254	9.000 2.547	1.009 0.790	0.536 1.266
達成 n=20	25.450 2.089	17.200 1.852	0.371 1.165	-0.452 1.138

		下位30%			上位30%			
		n/基準	平均	標準偏差	n/基準	平均	標準偏差	t
両親からの自立								
精神的自立	主成分I	24	-0.298	(0.946)	34	0.291	(1.129)	2.008*
	主成分II	(≤ 5)	0.113	(0.650)	(≥ 10)	-0.370	(1.043)	2.172*
情緒的断絶	I	39	0.294	(1.150)	36	-0.288	(0.758)	2.608*
	II	(=0)	0.404	(1.010)	(≥ 4)	-0.028	(0.967)	1.890
職業決定・未決定								
決定	I	33	-0.593	(0.832)	28	0.875	(0.846)	6.810**
	II	(≤ 7)	0.338	(0.836)	(≥ 14)	0.032	(1.177)	1.151
回避	I	34	0.719	(0.950)	35	-0.684	(0.685)	7.019**
	II	(≤ 7)	-0.204	(1.159)	(≥ 14)	0.108	(0.800)	1.300
拡散	I	31	0.610	(0.963)	39	-0.510	(0.722)	5.562
	II	(≤ 10)	-0.503	(1.186)	(≥ 16)	0.339	(0.870)	3.427**
延期	I	29	0.273	(1.159)	35	-0.252	(0.932)	1.947+
	II	(≤ 3)	-0.002	(1.242)	(≥ 8)	0.101	(0.843)	0.414
模索	I	32	0.267	(0.858)	32	-0.230	(1.157)	2.237*
	II	(≤ 11)	-0.067	(1.166)	(≥ 9)	0.050	(1.136)	1.028
自我同一性地位								
傾倒	I	33	-0.558	(0.693)	34	0.612	(1.009)	5.430**
	II	(≤ 17)	0.226	(0.799)	(≥ 23)	-0.246	(1.193)	1.803+
危機	I	31	-0.080	(0.954)	42	0.041	(1.081)	0.496
	II	(≤ 12)	0.125	(1.129)	(≥ 15)	-0.141	(1.038)	1.041

註 + ; $p < .1$, * ; $p < .05$, ** ; $p < .01$

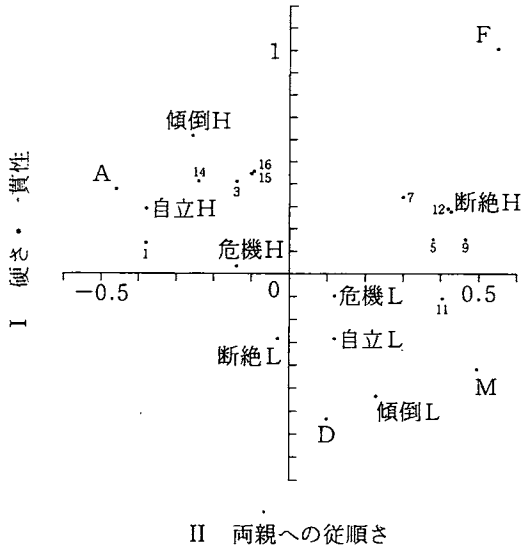


Fig.1 同一性地位・家族分離尺度の散布図

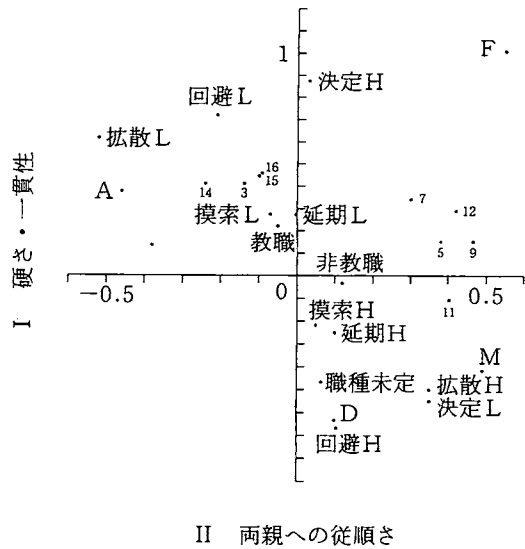


Fig.2 職業決定・教職志望・同一性地位の散布図

註 A：達成 M：モラトリアム F：早期完了
D：拡散 各地位
H：各尺度上位30%群 L：各尺度下位30%群
プロット中の数字は早期完了特徴項目を示す

註 A：達成 M：モラトリアム F：早期完了
D：拡散 各地位
H：各尺度上位30%群 L：各尺度下位30%群
プロット中の数字は早期完了特徴項目を示す

Table 9 自我同一性地位ごとの教員希望数 ()内は%

	教員志望	非教員志望	未定	合計
拡散	7(53.8)	2(15.4)	4(30.8)	13(100.0)
モラトリアム	3(33.3)	2(22.2)	4(44.4)	9(100.0)
早期完了	7(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	7(100.0)
達成	11(55.0)	4(20.0)	5(25.0)	20(100.0)
合計	28(57.1)	8(16.3)	13(26.5)	49(100.0)

考 察

(1) 早期完了特徴項目について 早期完了特徴項目の主成分分析の結果から第I主成分は信念や自分の進路についての硬さ・柔軟性のなさに関する項目を表していると考えられ、「硬さ・一貫性」に関する軸と考えられる。しかしこの第I主成分の主成分得点と自我同一性地位尺度の「傾倒」の得点の間には高い相関関係が見られ、必ずしも柔軟性を欠いた硬さ

だけでなく、自己のあり方を決定し積極的に関与する側面も反映されていると考えられる。しかし後述するように Fig.1 から早期完了地位の者が第I主成分の得点がとりわけ高いことから、信念の一貫性が極端に高くなった場合、柔軟性を欠いた硬い信念となるものと考えられる。

第II主成分は、両親や周囲の年長者の生き方をそのまま取り入れた姿勢を示す項目からなっており、「両親への従順さ」を表す主成分と考えられる。「自分の判断は大体において両親から支持されると思

う」は第Ⅰ主成分に高い固有ベクトル値を持つがプロットの位置関係及び項目内容が見ると第Ⅱ主成分の「両親への従順さ」に包含されるとも考えられる。自我同一性地位尺度の「危機」上位群及び下位群の平均値のプロットを結ぶ直線は、第Ⅱ主成分の軸にはほぼ平行しており、両親の価値観からの離脱が、自分自身の人生について深く考える「危機」と関連が深いことが示唆された。

(2) 各地位について Fig.1より早期完了地位の者は第Ⅰ・Ⅱ主成分得点とも高い得点を示し、進路選択や信念についての硬さと一貫性をもつと共に、両親の規範や価値観を継承するといった特徴をもつ事が見いだされた。すなわち Marcia (1966) などで述べられてきた早期完了青年の特徴と合致するものであり、北村 (1983) の指摘する「柔らかいF」は見いだされなかった。また本地位は職業決定・未決定尺度においても、「職業決定」が高く「職業模索」が低いなど、早期完了地位の特徴がそのまま反映されている。このことは、仮説に反して、傾向と危機による地位判定と、早期完了特徴項目から導かれる像とが合致することを示している。

早期完了地位だけでなく達成地位においても「硬さ・一貫性」の主成分得点が高かった。鎌・宮下・岡本 (1984) は、早期完了者は傾倒と見せかけの自信が高いために、自我同一性達成者と一見区別がつきにくいと指摘している。本研究における第Ⅰ主成分は、自我同一性地位尺度の「傾倒」得点と相関が高いことからみても、自我同一性達成者にみられる一貫した傾倒と、早期完了者における硬直した信念とが十分分離できなかったものと考えられる。しかし有意差はないものの「信念の硬さ」は早期完了地位が達成地位より高い地位にあり、また両親への従順さについても達成地位が低く、早期完了地位が高いことが両者を分ける特徴として示唆されよう。

また教育学部の特徴として、進路・職業選択に関して試行錯誤することを余り歓迎しない、教育界独特の社会的望ましが反映しているとも考えられる。このことは、進路に関しての危機体験を反映すると考えられた「学部や専攻を決める時、真剣に考えて決めた」項目が、「硬さ・一貫性」主成分に高い正の固有ベクトルを持ち、危機の欠如を表すと考えられた「今所属している学部や専攻は迷わず決めた」と同じ方向性を持つことから示唆される。

モラトリウムと拡散の地位に関しては、「危機」の上下、「傾倒」の上下を結ぶ軸によって座標平面を分割すると、「危機が高く、傾倒が低い」はずのモラト

リウムが「危機も傾倒も低い」象限となり、逆に拡散地位が「危機が高く、傾倒が低い」象限に位置している。しかし、Table8にあるように、モラトリウム地位と達成地位（共に危機の高い地位）での第Ⅱ主成分得点は、正負が全く逆転しており、危機の上位群（両地位をプールしたもの）としてみた場合には、達成地位が圧倒的にケースが大きいことから、第Ⅱ軸の負の位置に平均値が位置するが、モラトリウムと達成の両地位に分割した場合、第Ⅱ主成分得点については2つの地位で逆の傾向を持つことになる。このことは、同じ「危機が高い」とされる者でも、達成地位では両親からの規範・価値観から自立した自己独自のものを持っているのに対して、モラトリウム地位の者は危機の状態の最中にあり、未だ両親からは分離できず、危機の直中で、両親に対してアンビバレントな (Marcia, 1980) 状態にあることが示唆される。

(3) 職業決定との関連 職業決定・未決定尺度と各地位との関係からは、モラトリウム地位が他の地位に比べ有意に高い平均値を持っており、Fig.2のプロットも「職業拡散」上位群に近い。逆に本来のモラトリウムの特徴を反映すると考えられる「職業模索」上位群のプロットとはかけ離れている。また「職業回避」についてはモラトリウム地位は他の地位より高い平均得点をもつが、拡散地位のプロットも「職業回避」の上位群とほぼ重複している。「職業拡散」の項目は、職業選択に対する不安感を中心とした項目内容となっており、職業領域での同一性拡散というよりも、職業選択に関する逡巡（危機）から生じる不安とも考えられ、モラトリウム地位の特徴として見ることもできる。これは下山 (1992) が本下位尺度について、他のモラトリウム状態よりも職業決定の判断に深く関与したものとしていることと符合する。すなわち、これらの青年は加藤 (1983) の述べるモラトリウムー拡散中間地位に内容的に該当し、「職業模索」のプロットが「積極的モラトリウム地位」に該当するとも考えられる。一方「職業回避」の項目は、文字通り職業選択を回避しようとする項目内容であり、同一性拡散地位と整合する。

(4) 教員志望との関連 実際の職業決定状況を示す教員志望に関する項目のプロットからは、教職を志望する者の平均値は達成地位と同じ象限に位置しており、必ずしも早期完了的な教職選択が主流ではないことが見いだされた。しかし Table9に見られるように早期完了地位の者はすべて教員志望であったことから、教育学部における教職志望の中に、早期

完了的な職業選択傾向が見られると言えよう。しかしこの地位に分類された数も7人と小さいこともあり、一般化するには問題が残る。

(5) 家族からの分離との関連 家族分離尺度のプロットからは「精神的自立」下位尺度の上位群が第II象限、下位群が第IV象限に位置している。すなわち家族からの心理的離乳の過程と、モラトリアム地位や拡散地位という過渡的段階から、同一性達成に向かう過程がほぼ平行しており、家族からの自立を放棄した者は早期完了地位になるという関連が示唆された。Orlofsky, Marcia & Lesser (1973) は、自我同一性の地位が高い者（達成・モラトリアム）ほど低い地位（早期完了・拡散）よりも、これに引き続く発達段階である親密性地位も高いとしている。これは高い危機をもつモラトリアム・達成地位の者の方が、危機の小さい早期完了・拡散地位よりも両親からの分離が大きく、それだけ家庭外での対象との親密さが確立できるということを示唆する。

(6) その他 本研究では女子青年のみを対象とした研究のため、男子青年との違いについての問題点は残る。無藤 (1987) は女子青年の自我同一性が、危機の有無よりも安定ないしは強い傾倒にもとづく可能性を示唆し、達成・早期完了とモラトリアム・拡散間で適応性などに差が出るとしている。本研究においてもモラトリアムと拡散地位が Fig.1 で同一象限にプロットされたことは、こうした傾向を示唆するものである。また男性の自我同一性形成に大きく関与するとされる職業領域が女性にそのまま適用できるのかという問題も残る。Fitch & Adams (1983) は、男子青年は職業的同一性、女子は宗教的同一性がそれぞれ高い親密性に関係あるとしている。しかし宗教領域は日本の青年において殆ど問題にならない点、本研究のように職業志向の強い学部（教員養成学部）を対象としたことなどから、女子においても職業領域での同一性が、自我同一性地位と対応する結果となったと考えられる。また本研究では教育学部のみ分布を元にした地位分類であり、傾倒・危機得点ともに理論上の得点の中央値より高いことなど、全体に「同一性達成」傾向が強い群であった可能性は否定できない。

以上のことから、早期完了青年像の明確化について男女両性についての、幅広い学部の学生に対する検討が、今後の課題として必要になると考えられる。

引用文献

- Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle. (エリクソン, E.H. 「自我同一性」 小此木啓吾訳編 誠信書房 1973)
- Fitch, S.A. & Adams, G.R. 1983 Ego identity and intimacy status: replication and extension. *Developmental psychology*, 19, 839-845.
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 北村英哉 1983 現代日本における自我同一性形成の特質—早期完了群の再検討を手がかりにして— 東京大学教育学部心理教育相談室紀要 4, 143-151.
- Moore, D. 1987 Parent-adolescent separation: the construction of adulthood by late adolescents. *Developmental psychology*, 23, 298-307.
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of personality and social psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J.E. 1980 Identity in adolescence. In J. Adelson (ed), *Handbook of Adolescent Psychology*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 159-187
- 村瀬孝雄 1984 青年期危機説への反証 精神科MOOK 6, Pp.30-36. 金原書店 東京
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究 27, 178-186.
- 無藤清子 1987 自我同一性 児童心理学の進歩 26, 197-224.
- 岡田 努 1991 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究 1, 11-18.
- Orlofsky, J., Marcia, J. & Lesser, I. 1973 Ego identity status and the intimacy versus isolation crisis of young adulthood. *Journal of personality and social psychology*. 27, 211-219.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究 34, 20-30.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアム下位分類の研究: アイデンティティの発達との関連で 教育心理学研究 40, 121-129.
- 杉原保史 1988 自我同一性地位における早期完了型について 心理臨床学研究 5, 2, 33-42.

- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1984 半構造化された面接によるカテゴリ分類法 鐘幹八郎・山本力・宮下一博 1984 自我同一性研究の展望 シンポジウム青年期3 ナカニシヤ出版：京都 Pp.67-84.
- 高橋裕行 1984 自我同一性と Marcia の同一性地位面接：批判的展望 教育心理学研究 32, 320-328.
- 都筑学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究 41, 40-48.